

吉川幸次郎著 『杜甫』

東京 筑摩書房 世界古典文學全集

一九六七年十一月 三〇五頁

あるまとまつた長さの文學作品を読む時、あるいは一人の詩人の別集を通讀する時、讀者は、それぞれにその作品、作者について一つのイメージを思い描くであろう。そうした、たいわば思いつきをまとめて、評論風の議論として提出しても、それが古い作家、作品に關するものであれば、文學

書 評

史の議論として認められよう。思いつくこと自體が、讀者のそれまでの生活體驗とその思想に規定されている以上、それは一つの論理的な體系を持ち、それを基礎にして他の讀者との議論も可能である。あるいは文學史は、突き詰めれば、古い文學作品に對する精密な評論以上のものではないのかも知れない。我々が、古い文學史を飽き足らなく思ひ、新しい文學史に共感を覺えることが多い時、文學史の方法の進歩を慶賀すべきではなく、新しいものが我々に近い生活體驗、思想を基礎としているからにすぎないとも考えられよう。しかし文學史の研究をより客觀的なものとするのできる一つの方法がある。それは、そこに使用されている言葉によつてその作品を把握しようとする方法である。

吉川博士の筑摩書房 世界古典文學全集『杜甫』は、『王洙本杜工部詩集』第一卷、第二卷の計九十七首の杜甫の初期の詩に詳細な註釋を加えられたものである。その註釋は、なによりも用語の面での探求に最大の努力を拂われている。杜甫の詩句にあらわれた各々の言葉について、可

能なかぎりそれに先立つ使用例を集められ、そうした例との對比によつて杜甫におけるその語の意味とその背後にあるイメージとを的確に捉えておられる。その鋭いと共に確實な手つきは、あたかも庖丁の牛を解くが如く、餘人の及び得ない所であろう。また、各々の語句の註釋に先立つて記される一つの詩全體についての解説においても、これまでの註釋を超えた斬新な説明を數多く示される。特に、杜甫が自己の詩に先行するものと考えたであろう文學作品を取り挙げられ、單にその類似點を指摘されるのみではなく、兩者の關係を有機的に把握しようと努力されている。一つの語句の有するイメージについても、また一つの詩を成り立たせている發想についても、どこまでが傳統的、普遍的なものであり、どこまでが杜甫獨自のものであるかを、はつきりと示される。そして、その杜甫獨自のイメージ、發想の追求において、博士はきわめて勇敢である。

『文選』と杜甫との關係は、この註釋において重點的に解明に努められた問題の一つである。『文選』を含めて六朝の文學を杜甫はどのように批判的に繼承したかが用語の

面から押えられているのは、これまでの文學史が抽象的に扱うことの多かつた六朝文學と唐代文學との關係について一つの確實な事例を提出されたと云えよう。もつともこの書物の性質上、博士の視點が常に杜甫の上にあつて、六朝の詩に對しては少し冷淡すぎるように見うけられる。六朝の使用例が貧弱なイメージしか包含させ得なかつた單語を杜甫はいかに重厚に使用したかを強調される時、六朝の詩人たちからは、我々はそうしたものをめざして詩を作つたのではないという抗議が出そうではある。

この註釋と一昨年雜誌『展望』に一年にわたつて連載された「杜甫私記」とを併せ讀む時、昭和二十五年『杜甫私記第一卷』で提出された杜甫像(特に開元天寶期の杜甫像)が、博士の内部で大きな變革を受けたことを知ることができる。『杜甫ノート』、『杜甫私記第一卷』などで描き出された清冽な杜甫像は、あるいはなお餘人の追従を許すものであろう。しかし近年になつて結ばれた新しい杜甫像をもつて、博士は古今獨歩の地位に立たれたように見える。それは、うす暗く、エネルギーに満ち満ちた世界を凝視しつ

づける杜甫の像である。天と地との間を奥深くまで、肉體を置きざりにした杜甫の精神が——あるいは肉體までも精神に置き替えた杜甫が「冥搜」してゆく。その天地の構造は、非日常的であり、骨太く、また哲學的でもある。このような杜甫像を描き出された最も顯著な註の一つとして、「同諸公登慈恩寺塔」に附されたものを挙げ得よう。嚴密な用語の検討を通して形造られたこの肉厚く、力強く、そそり立つた杜甫の像は、以前には我々の思い描くことのできなかつたものである。

ここで、私のささやかな不満をもらせば、この天地構造に直角に交つている歴史についての杜甫の意識を追求されることが少ないように思われることである。博士は、開元年間は太平の時期、天寶年間は下降の時期であり、杜甫には安史の亂に對する豫感があつたという風に、この時代の一般的な歴史の規定と杜甫の歴史意識の抽出とを行なわれる。しかし、我々は安史の亂が起つたことを知っているからそれは安史の亂に對する豫感であるのだが、杜甫個人について云う時、なにに對する不安感であるか分らない時期

の豫感を支えていた彼の歴史意識は、かえつて骨太いものであり、哲學的なものであつたのではないか。化して長き黃虯となる金の蝦蟇を至尊の前に出現させる（「奉同郭給事湯東靈湫作」）のがその典型となるように、強いて名附ければ五行志的歴史觀とでも稱すべきものを杜甫は持つていたように思われる。歴史書の中の五行志を支えているのは、表面的な觀察が捉えるような青白い、薄つぺらい思考ではなく、危機感に溢れてはいても、骨太いもの——いわば亂世にたえるために變態はしていても正統な儒家思想を受けついだものと規定できよう。もちろんこの歴史觀についての暗示が註釋の中に見えないわけではない。しかし安史の亂に對する豫感という言葉を使用されることによつて、かえつてそれを十分には説いておられないように思われる。この歴史意識の構造をより深く追求されることによつて、詩句の處々に點綴される一見奇妙なイメージを持つ語の意味が、單になにかの象徴であるということを超えて、よりよく理解されるのではなからうか。五行思想が天地構造についての哲學であると共に強度に政治的な思想である、そ

のような點からも杜甫の政治觀、特に彼の政治参加へのあせりの意味も知ることができそうに思われる。

また、博士が必ずしも得意とされぬ所ではあるが、初期の杜甫の思想の構造において佛教、道教がどのような意味を持つていたかを説かれないのも、少しもの足りなく感じられる。招提に遊んで深省を發したという詩（「遊龍門奉先寺」、硬玉茶漬術を試みようという詩（「去矣行」）などにおける佛教、道教は、杜甫にとつて單なる教養にすぎなかつたのであろうか。たとえば、言葉のイメージによつて一つの哲學的な天地を作りあげ、その中を冥搜してゆこうとする彼の精神は、廣い意味での道家的な思考に支えられていたと考えられないであらうか。

博士は、杜甫の詩の最大の特色の一つとしてその現實性を強調される。この註釋においても開卷劈頭の「奉贈韋左丞二十二韻」の第一句、餓死の語についてそれを指摘される。博士の云われる「用語に及ぶ杜甫の現實性」（「贈衛八處士」注十三）は、用語の背後にあるイメージの現實性を意味されるように見える。その作品にこめられた杜甫ののつ

びきならない感動——他人に替つてもらうことのできない感慨——を定着した用語を現實的とされているように思う。そして、このような用語の嚴密な検討と的確な把握の上に、前に述べた博士独自の杜甫像を築かれたわけである。しかし、杜甫の内部の現實性を、その表現である用語の現實性を通してこのような強力な杜甫像に收斂される時、かえつてそれは現實と乖離してゆくように、私などには感じられる。高くそびえ立つてしまつた杜甫像からは、時間と空間に限定された杜甫自身の現實に還元するものがないように見える。

博士の提出された杜甫像には必ずしも收斂されない種類の詩、例えば「示從孫濟」の詩、あるいは「自京赴奉先縣詠懷五百字」の詩、制作の時期に問題はあるにしろ「贈衛八處士」の詩などにこそ、現實の生活に密着しているという意味での眞の現實性が見られるように思う。必ずしも「朱門に酒肉臭り、路に凍死の骨有り」というような句があるから現實的だと云うのではない。かえつて、この句の後に「榮枯咫尺に異なり、惆悵再び述ぶるに難し」というよ

うな句を續けることによつて、思考の斷絶に託された杜甫の感慨は知りえるにしても、彼の現實性は疑われるべきだと思ふ。私が云う現實性とは、現實生活の外に強力なイマジネーションの世界を作り上げてその中を冥搜してゆくのではなくて、悲しみも喜びも生活の次元を離れることなく、それを的確に詩にしているという點である。こうした詩について、近ごろ博士は多くを語られない。この註釋においても「平易な感情を平易な語彙で述べる」(「夏日李公見訪」)という以上の解説を加えられない。しかし平易な語彙で述べられた日常の生活感情に密着した作品にこそ杜甫の文學の本當の大きさが見られるのではなからうか。

私がここに記した不満は、おそらくは、博士が幾つかの非日常的な語彙を支點に築かれた杜甫像があまりにもそり立つていることに、一種の危惧を懷いたということ以上のものではないであらう。しかし、文學史の窮極の目的が各々の作家の力強い像を形造ることにあるのかどうか――そうではない文學史の方法がありえるように思ふ。

最後に、博士が各々の詩に附けられた日本語譯について

書評

述べたい。詩の言語としての日本語は、陰翳に富ませ、はかなげに使用するだけがその能ではないであらう。特に中國の詩を翻譯するに當つては、日本語の心弱い抒情性が大きな障害となるにちがいない。しかし、博士が散文において成功をおさめられるものとなつてゐる言語に對する強い自信は、この譯の翻譯においては、必ずしも有効には働いていないように見える。こういった云い方が失禮に當らねば、一つの言葉は、他の文化に屬するもう一つの言葉には、どんなことをしても完全に云い代えることができないのだということをも、十分には心に留めておられないように見える。詩中の物名、官名を、そのまま過不足なく日本語のある一つの物名、官名に代置され、同様のことをよりイメージに富んだ言葉にまで及ぼされている。全體として見たときは優れた翻譯であると思ふが、多くの場合、日本語譯に托された博士のイメージを理解するのに苦しむ。中國詩を翻譯されるに當つて、日本語の情緒的な面を切り離され、機能的な面をのみ使用されようとするのは、一つの優れた

方法であると思うが、それならばなぜ現代語を用いられないのだろうか。歌舞伎の雰囲気、文語文の中に、處々古事記的語彙の浮んでいるこの翻譯は、かえつて讀者を混亂させるのではなからうか。

この註釋によつて、博士は從來の數多い杜詩の註釋から一頭地を抜きんでられているばかりでなく、註釋の仕事のあるべき新しい一つの形を示しておられる。しかし何分にも杜甫の全作品の十數分の一の作品、それも今なお完成途上にある作品についての註釋である。初期の作品から博士が形造られた天地を凝視し、イメージの世界を冥搜してゆく杜甫像が、「青白い」秦州雜詩の世界とどのように繋るのか（それが果して單なる杜甫の精神の後退なのかどうか）、更にこうした基礎の上での江南での杜甫の詩の成熟はどのような意味を持つのか、等々について、博士の解釋を早くお聞きしたく思う。なによりも御健康に氣を附けられて、『杜甫』を目にすることのできる日が早からんことを。

（京都大學 小南一郎）

莊司格一・清水榮吉・志村良治譯

『中國の笑話』笑海叢珠
笑苑千金 筑摩書房

一九六六年一月 三九四頁

笑いは生きものである。國が違えば、笑いもことなり、時代が變れば、笑いも相貌を變えてくる。我々は外國の漫畫を見ていて、しばしばおかしみを理解できぬことがあり、また江戸の滑稽本や川柳・狂歌を讀んでも、もはや現代人の願ねがひをはずさせることのない笑いに氣づくのである。

役人の子はにぎにぎをよく覺え

徳川の世も、宇宙時代とやらの當世のお役人も、しよせん袖の下に弱いという氣質だけは改まらず、その餘慶として、我々はいまだにこの句の耶揄をわがものとすることができる。だが、さて次の句はどうか。

役人の骨つばいはちよき猪牙に乘せ

袖の下では口説き落せぬ難物なら、ままよ次の手、闇にこぎ出す猪牙舟に押し込んで、吉原の色じかけといこうというのだが、吉原が消え猪牙舟が失せた現今、この句の諷